

7. 前立腺肥大症患者に対する 牛車腎気丸の臨床効果

富山大学大学院医学薬学研究部 腎泌尿器科学¹⁾

上越総合病院 泌尿器科²⁾

○藤内 靖喜¹⁾、旦尾 嘉宏¹⁾、飯田 裕朗¹⁾、伊藤 崇敏¹⁾
森井 章裕¹⁾、保田 賢司¹⁾、渡部 明彦¹⁾、野崎 哲夫¹⁾
里見 定信²⁾、小宮 顕¹⁾、布施 秀樹¹⁾

【緒言】前立腺肥大症に対する治療は α 1遮断薬が中心となっているが、過活動膀胱を合併している抗コリン薬などを併用するも効果不十分な症例も存在する。近年の新規薬剤の開発で治療の選択肢が増えてはいるが治療に難渋することも少なくない。今回、 α 1遮断薬や抗コリン薬などの初期治療を行うも症状の改善が不十分な症例に対して牛車腎気丸の投与を行い、その臨床効果について検討した。

【対象と方法】2008年4月から2010年12月まで前立腺肥大症にて α 1遮断薬や抗コリン薬などの投与を受けるも症状の改善が不十分（蓄尿症状が残存）であった15例（平均年齢69.1歳、平均前立腺体積29.8ml、実虚問診表による実証6例、虚証9例）に対して牛車腎気丸7.5g、分3の投与を行った。なお、初期治療薬は原則継続した。投与前および投与8週後にIPSS、QOLscore、OABSS、BII（BPH Impact Index）、残尿量、排尿記録による排尿回数、排尿量などについて効果判定を行った。

【結果】IPSSは治療前16.9点から治療後13.9点へと改善傾向（ $P=0.063$ ）、QOL scoreは治療前5.2点から治療後4.0点へと改善した（ $P<0.01$ ）。IPSSの各項目別の変化についてみると腹圧排尿と夜間排尿回数の項目において有意な改善が認められた（ $P<0.05$ ）。BIIは治療前6.93点から治療後5.47点へと有意な改善が認められた（ $P<0.05$ ）。OABSS、残尿量は治療前後で有意な変化は認められなかった。排尿記録による検討では排尿回数、排尿量、夜間多尿指数、1回排尿量、睡眠時間に有意な変化は認められなかった。HUS（Hours of Undisturbed Sleep）は治療前191分から治療後222分と延長が認められた（ $P<0.05$ ）。

【結語】初期治療に対する効果が不十分であった前立腺肥大症患者に対して牛車腎気丸の投与は治療の選択肢の1つであると考えられた。

8. 女性過活動膀胱患者に対する 牛車腎気丸の有用性と治療効果および 期間の関連について

広島大学大学院医歯薬学総合研究科
創生医科学専攻先進医療開発科学講座¹⁾

中津第一病院 泌尿器科²⁾

○梶原 充¹⁾²⁾、牟田口 和昭²⁾、神明 俊輔²⁾、松原 昭郎¹⁾

【はじめに】OABに対する抗コリン薬は約7割が3ヶ月以内に中止されることが知られている。本研究ではOAB女性に対する牛車腎気丸の治療効果、実際の治療期間、内服の継続性をレトロスペクティブに検討した。

【対象および方法】2004年10月～2005年5月にOABの診断にて証に関わらず初期治療として牛車腎気丸7.5g投与を受けた女性52名（平均68歳）の診療録から治療期間、治療効果、治療中止の場合は中止理由を調査した。効果は投与開始8週後にIPSS-QOLを用いて評価し、1点以上のスコア減少を有効、不変またはスコア増加を無効と定義した。

【結果】投与を受けた52例中コンプライアンス不良のため8週未満で内服中止となった7例と治療中に間質性膀胱炎疑いと診断されたため対象から除外した1例を除く44例のうち23例（52%）が有効であった。診療録の調査から治療期間が明確であった47例の治療期間（mean \pm SD）は192 \pm 438日、投与後3、6、12ヶ月での治療継続例はそれぞれ17/47（36%）、8/47（17%）、4/47（9%）、投与後3、6、12ヶ月の治療継続例のうち治療開始8週後に有効であった割合はそれぞれ11/17（65%）、5/8（63%）、4/4（100%）であった。14例が抗コリン薬に変更され、その有効率は4/14（29%）であったが、継続投与されていた症例での有効率は19/30（67%）であった。有害事象による休薬、薬剤変更はなかった。

【結語】OAB女性に対する牛車腎気丸の治療期間は6割以上が3ヶ月以内であった。治療継続および抗コリン薬への変更は、いずれも8週での効果との関連性を認めた。今後、患者データやOAB症状のデータマイニングを構築し、効果との関連性を見出すことが、経験知である「証」とはとられないOAB治療の実践につながると考える。